第 2 回土橋自然観察教育林連絡協議会議事録

日　時：平成 23 年 12 月 7 日（水）19 時 00 分～
場　所：厚沢部町図書館視聴覚室
事務局：中井文夫（教育長）、笹森浩明（事務局次長）、石井淳平（社会教育係）、野村昭英（教育林コーディネーター）

１．開会

２．教育長挨拶

中井：すっかり寒くなった今日この頃、夜分お疲れのところ出席をいただきありがとうございます。連絡協議会としては、5 月の協議会から 2 回目の会議となる。代表を私の預かりとするなど、組織形態も未熟なまま現在にいたっている。今日は平成 23 年度の事業の中間報告と来年度の事業計画について話していきたい。教育林では、10 月末にクマが出没したことから、ハンターさんと立会、10 月 30 日から教育林全山を立ち入り禁止している。山に木の実が不足したため熊が冬眠できないのではないか、という話も聞いている。ともあれ、多くの意見をいただき、次年度事業の計画などに結びつけたい。

３．協議事項

協議事項１　平成 23 年度土橋自然観察教育林関係事業中間報告

(1) 様似町アポイ岳視察用務

会員：北海道が監視カメラを設置して監視をしていた。今はないのだろうか。
野村：監視カメラは、目立つようにすることで抑止効果があるので、あれば気づくと思うが、わからなかった。

(2) レク森講座ワークシートの分析

会員：ワークシートは記入できる項目とできない項目があって、半分くらいしか書けなかった。
会員：ほかの人が記入しているのをみていると、評価が逆に（本来は 1 が低評価、5 が高評価）なっている人もいた。フリートークの発言で気になったのは、「見本林がどこから始まるのが分からなかった。外国樹種が出てくるのが唐突だ」という意見があったことだ。⑦～⑥はヒバの植林地があること、人家が見えることなどがあり、人工的な環境が多いことから

このような低い評価となったのではないかと推測する。③～⑪はトドマツとヒバが混交林的に現われる。森に対する期待感が高まるところで、教育林の一番魅力的な場所ではないかと個人的には思っている。参加者は、普段から自然に親しんでいる方々が多く、そのような自然の景観の変化を理解できたため高い評価となったのではないかと思う。

会員：⑤～⑦は林内へ入っていく期待感が裏切られるような落胆があるのではないか。また、見本林のあずまや（2 階建ての八角堂）が気になる。この建物の活用方法を工夫して欲しい。ここまで行くことが楽しみとなるような利用法を考えるべきだ。たとえば、あずまやに上って鳥をみるとか、高い位置から木の枝をみるというような活用を考えるべき。見本林の位置づけをはっきりとさせるべきだ。まったく手を入れられないようではもったいない。

会員：見本林も含めて営林署の管轄だった。森林展示館やバンガローも行政の中で建物を建ててきた。砂防ダムはかつては 2 か所しかなかったものが増えてしまった。治山という観点から作られた経緯がありやむを得ない側面もあるのではないか。すでにできてしまった建造物に手をつけるのは難しい。見本林は、かつてはテントを張ることのできる場所だった。見本林の樹木は間伐・枝払いもされていないので、そのような作業の必要性も整理するべきではないか。バンガローを撤去すべきとの意見もあるが、町外からの申し込みが殺到する施設で、町の PR や活性化には必要な施設と考える。観光と自然保護には相反する面があるので難しい。畑内川改修工事の際に護岸に在来の植物ではなく外来種の芝を貼付けた。このエリアも自然に返すのは難しいエリアだと思う。管理のための線引きが必要だと思う。

会員：砂利歩道は歩きにくい。①～②は砂利舗装でないといけないのか。

石井：砂利舗装でないと管理用道路として利用できない。

会員：それは違う。あの道幅にしたのは営林署時代に道路として使いやすいように平らに削ったのだと思う。本来は自然の土壌がつき固まったような状態だったはずだ。

会員：外来種の見本林をつくった時に、上からの排水が路面を痛めるということを考えてのことではないか。

会員：営林署時代の当初の道路の傾斜がどのくらいかわからないが、砂利舗装によって以前と変わった。削ったことにより、外来種が入りやすい環境となってしまった。

会員：小沼の木道の幅が広すぎる。あれはいつ頃掛け替えたものか。

笹森：木道は平成 17 年頃に掛け替えている。以前の木道の柱を利用しているので、大きく幅が変わったことはない。

会員：杭の周りに掘り上げ土が露出していた。支柱も掛け替えているのではないか。

笹森：腐った部分だけ取り換えた。

森　：平成 9 年頃から大雨が続き、土砂の流出があって、林道などでも痛みが多い。そのときから植生などにも変化があるかもしれない。

(3) トドマツ母樹標識テープ撤去作業顛末

会員：トドマツ母樹は 820 本ほど指定されていた。2003 年に母樹を切るかどうかの調査をして、ナンバリングもしてある。管理簿が整備されており、それには地図に母樹の地点を落としているはず。事務局の石井が入手したものは調査台帳であり、別物だ。管理簿がないと母樹に指定された個体の確認ができない。トドマツ母樹は農林水産大臣が決めるもので、林

野庁は解除できない。教育林内には用途不明のナンバリングがたくさんあって混乱したのだと思う。最近、ヒバの根元に真新しいナンバリングがあった。様々なナンバリングがあって混乱している。

笹森：登載 820 本のうち、適格木は 475 本、このうち樹幹の腐れと枯損を除いた健全な個体は 17 本となっている。

会員：テープが元に戻っても、ナンバーが戻らないと意味がない。どのようにしたら復元できるのかを林野庁と相談して実施してほしい。また、そういう活動を通じて学習活動をしてほしい。2003 年に周辺整備の委員会があったときに鮫島先生を呼んで講演会を行った。鮫島先生は、昭和 35～6 年にトドマツの調査をした。そのような学習活動をすればもっと歴史的な学習ができるのではないか。鮫島先生とは今後トドマツがどうなるのかという話をした。教育林がトドマツ育成の適地ではなくなりつつあるのではないか、ということを話し合っているうちに、教育林内の別の場所でトドマツの若木が生育している場所があることを確認した。トドマツの分布が林内を移動していると考えられるので面白かった。トドマツは北方性の樹木なのだが、厚沢部まで南下してきたと考えられる。

会員：トドマツの寿命は 50 年くらいだろうか。

会員：130 年くらいといわれている。

会員：トドマツの根が張りにくいのはなぜか。

会員：地盤を抑える力が弱いといわれている。根の支え方が違う。針葉樹は全体的に根が張りにくい。

会員：トドマツを保存する価値は何か。森林は利用してこそ価値があると思うのだが、利用せず保存する目的はなんだろう。

会員：教育林のトドマツは木材として利用するために保存されているのではなく、種を採取することを目的として保存されている。競争で厳しい環境で自然に生育した個体の種子が次世代の苗として使用される。自然が選んだものを使うべきという考え方だ。そのために特別母樹林として維持されている。

石井：トドマツ母樹のナンバリングとテープの復元については林野庁と協議を行い進めることとする。

会員：佐藤謙先生もおっしゃっていたが、森林管理署にもまだ資料が残されていると考えられる。これらの資料の収集にも取り組んでほしい。

協議事項２　平成 24 年度土橋自然観察教育林関係事業計画

(1) ヒノキアスナロ人工林除間伐事業計画

会員：なぜ矮小木を切るのか。光を入れることが大切なら、大きい木を切るべきでは。

石井：光を入れることを最優先に作業する。

会員：植林以前の景観はなぜわかるのか。

石井：高層にトドマツやミズナラが形成されていることから、ヒノキアスナロ人工林はこれらの樹下植栽と考えられる。植林以前の景観として、現在高層を形成しているミズナラやトドマツ、トチノキなどが優先する植生と判断した。

(2)森林展示館前シラカバ後継樹育成事業計画

会員：シラカバは北海道的なイメージがある。保養地的なイメージ。

会員：後継樹候補樹木は、寿命の長い木が多いので壮観な景観になると思う。

その他

会員：教育林の入林禁止の原因となった熊の糞はどこでみつかったのか。

笹森：③～⑪のコース上。それ以前から⑦～⑧、⑥～⑧で出没しており、それらコースは９月頃から閉鎖していた。

会員：シカの痕跡は教育林内で確認できるか。

野村：ときどき足跡を見かける。

会員：食痕はどうか。

野村：わからない。

（21 時 10 分閉会）